

## 電子オルガンにおける編曲演奏の可能性

### —再現からの脱却—

Possibility of performance under new arrangement with electronic organ:

Departure from reproduction.

音楽文化研究科 音楽表現専攻 07-1037 坂本 幸子

電子オルガンは未だ開発、改良が重ねられている発展途上の楽器である。搭載されている音色は既存する楽器の擬似的音色がほとんどなので、オーケストラの再現・代用としての利用価値は高い。しかしながら、楽器としての固有音を持たない電子オルガンの独自性を疑問視する声も少なくない。本論文は、このような楽器の特質を生かした編曲と演奏の可能性を広げ、単なるオーケストラの再現から脱却することを目的とするものである。研究対象曲は、ガブリエル・フォーレ（Gabriel Urbain Fauré 1845-1924）の《レクイエム Requiem op.48》である。

まず、第1章で電子オルガンの歴史、現行機種の特性や機能について解説し、第2章において、編曲という行為について考察した後、電子オルガンにおける編曲概念を検討した。第3章においては、電子オルガンにおけるスコアリーディングの考え方、レジストレーションの作成、各パートの取りまとめ方など、編曲作業の実際について考察した。

今回の対象曲のような合唱曲を電子オルガンで演奏する場合、これまではオーケストラ部分のみを取り上げた例が多く、4声体の合唱部分までを含んだ独奏スタイルへの編曲はあまり例を見ない。しかし、楽曲を構成する要素のうち、合唱部分をメロディ、伴奏部分をハーモニーあるいは対旋律として考え、「メロディ、ハーモニー、バスを同時にひとりで演奏できる」という電子オルガンの特性と併せて編曲の在り方について考えたとき、合唱部分まですべて含んだ独奏スタイルへの編曲は、電子オルガンだからこそ可能なものなのではないかという考えにたどりついた。

オーケストラスコアを元にした編曲には再現的な要素が含まれてしまうのは必然だが、スコアを元に作品を分析し、様々な演奏効果を推測し、編曲者独自の解釈と工夫を加えることによって、作品から新しい可能性を引き出すことができる。そのアイディアを電子オルガンの音楽として再構築することが、再現から脱却できる第一歩となるのではないかと考える。